

# 名物ぎれについて

岩 切 岑

## 一、錦

桑の樹にすみ、桑の葉のみを食う、蚕という昆虫が、人類に及ぼした影響こそ、不可思議な天の配剤である。もしあの虫が、居なかつたら、古代、東西の、文化交流は、よほど発達がおくれたであろうし、又今日の絹織物も、出来なかつた事であろう。又織物技術の中で、色々な組織の発明を促す様な高級な需要も、起らなかつたかも知れないと思う。その反面桑の樹の生えるところは、やがて養蚕の輝かしい世界が始り、絹織物の美しい花が開くのである。

黄土地帯のゆるやかに起伏する丘陵に、都城を構えようと考えた中国古代の王様達は、先ず、そこに桑がよく育つか、否、かを吟味したそうである。その王室の後宮には必ず桑と蚕室があつて、養蚕専門の宮がたてられ、やがて季節になると夫人及び女中が蚕室に入り蚕をかい始める。この祭儀を合図に、国のあちこちの農家でも、養蚕を始めるのである。かくしてとれた繭から、糸

を作り、織り上げ染上げて、其年の新しい式服が出来上る。農家では貢物ともなり、自分の衣料ともなり、又金にもかえやすいものとなつて、生活が潤うたのである。

周の代に始つた中国の礼を以て国を治める方針は、国家に必要な万般の制度を、礼式として確定し、それに必要な産業指導をも含めて、人民の一つのしきたりにしてしまつた。

その結果中国では、早くから国の政治力と、養蚕業、絹織物業と結びついて、国家の力が大いにこの業を助けたのである。冠婚葬礼はもとより、車馬朝駕の制にも一々整然たる定めがあつてほとんど需要し、宮廷には織物染物大臣や、大官があつて礼制を支えると共に産業発達の中核を形成した周礼の、天官、冬官、漢の少府、隋の大府、唐の少府、と段々拡大して、国家産業の中心となつた。この政治と、産業の調和が支那の富の重要なものとなる一方、日々中国の宮廷では、朝礼に参集する文武百官がみな、綺羅錦繡に身をかざつて、恰も一つのレヴェーの様な壮観を呈した。この朝礼の制服の壮嚴さは、中国から西洋にも東洋にも蔓延

して行つた。

我国では推古天皇の十六年に、大唐の使主裴世清を迎えて、聖徳太子を始め諸王諸臣が、悉く制度ある錦綾を着て歓迎されたので、唐の使者は日本をすつかり見なおし、東方君子の国の文化の立派さを讃嘆した。

唐と日本はこの頃から親しく交際し、唐の文物は朝鮮を経由しないで直接には入つてきた。所がその唐は当時恐らく世界の文明国であり、世界文化の中心とも云うべき有様であつたから、立派な世界的文化が日本には入つてきたのである。希臘の大理石も、印度の象牙も、南海の玳瑁も、王羲の書も、名僧の智識も、天下の名著、希有の秘薬も、どんどん入つてきた。この傾向は、聖武天皇の御代東大寺大仏開眼供養の盛儀に至つて、最高潮に達したのである。その夢の様な有様がそのまま現存しているのが奈良の正倉院の御物である。この奇蹟的に残つた世界文化の一大宝庫、正倉院には、特に染織品が豊富であつて、荘厳華麗なことは言うまでもなく、深く内容に入れば入るほど千三百年も前の盛唐の文化の豊かさに、おどろくそうである。この推古天平の古錦が、現存している名物製の最古のものである。

では錦とはどういうものか。支那では錦綾羅綺といつて錦は服の表地、綾は裏地、羅は薄物で、ヴェールのように被る。綺は組物又は細中織であつて、帯紐等に用いる。この錦と云うのは帛の価が金の価に等しいと云うほめ言葉の文字であつて、上等の織物の意味である。が後にもつと意味が広くなつて五彩の織物更に意味が広くなり、染めた糸をとつて文様を織出した

物、紋織先染の上等のもの、と云うような意味に用いられるに至つてゐる。中国で錦を織出した最古の伝説は、聖人天子、堯の御代に海人が錦を織つて献上したと云う。海人とは、山東省南部河南東部江蘇北部又は安徽北部あたりに、錦が織り出されたものであろう。漢の時代になると河南省の睢州に当る襄邑の錦が天下に名をなした。そこで出来た文様は黼黻漢錦等と云うから、古くから伝わつた文様であつたろうと思う。後漢も滅び三国志の時代になると、かの有名な軍師諸葛孔明が劉備を奉じて、蜀に入ると同時に大いに産業奨励を始め、蜀の成都に錦院を置いて錦を織り出した。蜀の成都の錦即蜀紅の錦は、俄然天下一の席を奪つてしまつた。爾後蜀紅錦の名は、深く、長く、ゆるぎなく伝わつて明治大正まで続いていたのである。この錦の手法に経糸の錦と、緯糸の錦とがある。正倉院の御裂では、獅鬣長班錦等が、経糸錦で、赤地錦などは、緯糸錦である。この経糸錦の方は、意外に早く衰えたらしく、法隆寺錦や、法隆寺伝来の蜀紅錦以外に作例は甚だしく、減少してしまつてゐる。即ち後世の蜀紅錦の大部分は、緯糸錦である。被服大事典を見ると、「錦とは、絹織の一人で多くは斜文地に、赤黄紫緑白の五色の色糸および金銀箔糸を用い華紋を織出したものの総称、神社仏閣等の装飾品、打敷、袷袢、表装、女帯地、能衣裳、袋物地、等に用いられる。古くから製織された高貴な紋織物で、其種類は頗る多いが、漸次変遷して、現時我が国で製造されるいわゆる錦類の重なるものは、大和錦、唐錦、唐織錦、糸錦、蜀紅錦、暈縹錦、蝦夷錦、金襴、等である。

大和錦は、倭錦ともかき、河内錦ともいふ。経には普通生糸の

諸撚糸または、片撚糸を半練もしくは、生のまゝ赤染したものを  
用い、緯には片撚練糸を美しい三種以上の色に染色し、これを各  
数本引き揃えて用い、そのうち一種を地緯とし他を絵緯として小  
葵の文様を現わしたものを、組織は地合、紋様共よぶの斜文織で  
ある。すなわち地組織は、地緯の色で現わし、絵緯で紋様を出し  
たもので、地と紋様とをすべて緯糸で織り出し、経糸の色は、ほ  
とんど表面に見えないものである。装飾、覆、打敷などに用いら  
れる。

車形錦、菱形錦、大伯仙錦、麒麟錦、などはたゞその紋様を換  
えたものである。

唐錦は単に錦ともいい、襦子地に絵緯を別撚糸を用い、よぶの  
斜文組織で押えたものである。絵緯には、金糸、平金、などが混  
用されている。

唐織錦は、唐織ともいい、斜文地に絵緯を浮かせて、紋様を表  
わし、絵緯を他の部分より高く表わしたものである。

糸錦は、経に諸撚の練染糸を用い、別に細い生糸を染めて、撚  
糸とし、甘撚の練染糸を地緯とし、二色以上の絵緯を用い、金  
糸、銀糸、平金、平銀、などを混用し、地組織は、よぶの斜文で  
絵緯で種々な紋様を現わし、表裏に浮いた絵緯と撚緯で、平地又  
は斜文地に組織せしめて、押えたものである。主として婦人帯  
地、袋物地等に供される。

蜀紅錦は、中国の産地名蜀江錦と書いていた。よぶの斜文地に  
赤緑青紫の絵緯と、平箔糸とを混織して、後に蜀紅模様と呼ばれ  
る美しい紋様を織り出し絵緯の浮いている部分を、別撚糸で押え

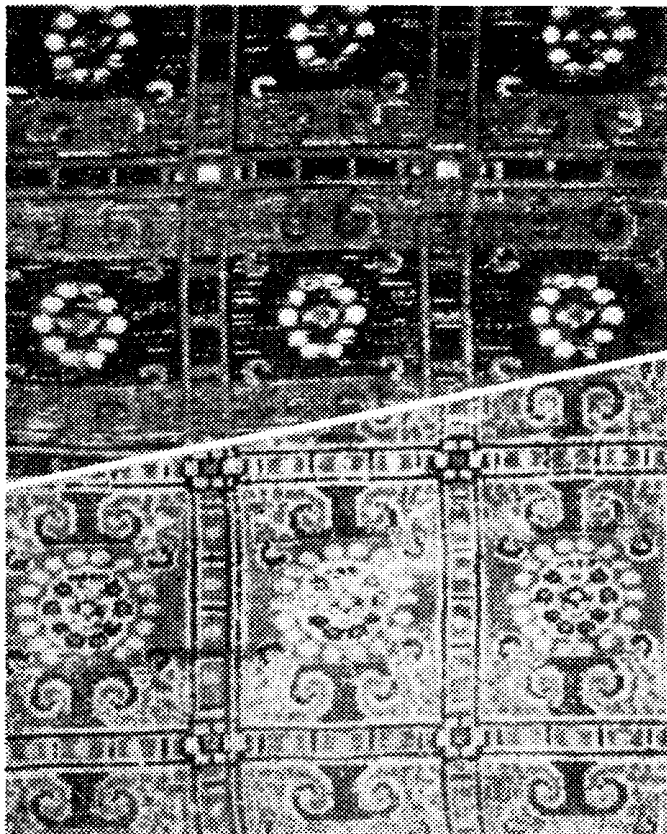
たものである。

暈縹錦は、霞錦ともいう。大和錦同様の組織で、赤緑白紫黄の  
美麗な色緯で霞形の段と、菱形の紋様を現わしたもので、諸物の  
縁に用いられる。

蝦夷錦は、五枚経襦子の地に、細い平箔糸と五色の絵緯をもつ  
て紋様を現わし、表に浮いた絵緯を地組織の二倍の襦子で、地撚  
みとし絵緯の不用の部分は、裏吹襦珍の様に、織物の表面にうか  
したものの。女帯地、袷袷地、その他装飾用に供せられる。

綴錦は、経に太い諸撚練糸をあらく用い、緯には経糸よりも一

蜀江錦（千二三年前の作）



層太い絹糸を種々なる色に染めて用い、模様の色に従つてその色の緯糸を経糸の所要部分に平織に組織せしめ、風景、花鳥、人物などを織出した美術織物。用途は女帯地、袷紗、袋物地、壁掛、衝立、その他室内装飾用などである。ベルギーおよびフランス産のゴブラン織と同一種類のものである」と被服文化協会編の被服大事典に書いてある。綴れ錦は最も古い手法の織物で櫛や爪で緯糸を手前へかきよせて、表と裏と二度ずつ織る。すると経糸が全く緯糸に包みこまれ粗い経に、ぎつしりと緯がつまつた綴地の錦が出来、表裏とも同じ文様が同じ色で見られる。

#### 写真説明

蜀江錦が名物裂のうちで最も貴重なものとして取扱われたのは、よほど古くからである。法隆寺、東大寺、その他の奈良の古寺に伝えられたものが永年のうちには偶々の機会に坊間に一部散佚して数寄者の手にうつり装漢の一字や、風袋などに用い、帛紗袋物類に賞でられていたようである。蜀江錦と書くほど紅色主調の華麗な錦で、黄、緑、藍を交えて便化された重辨の蓮花を中心とし、それを四隅から唐草風な文様でかこみさらに格子形に嵌めこんだ格天井形の錦である。この蓮花格子文錦は絳緯錦とも称すべきものである。

蜀江錦は蜀(二二一—二六三)の成都に近い錦城で創製されたと称せらる。成都は錦江に面し水清く、良い生絲を産し三國時代以前から高級織物を産した。「歴代尙未有錦而成都独称妙、故三國時魏則市於蜀、呈亦資西蜀至是始乃有之」と「耙陽記」に誌してある。三國時代には魏も吳も蜀錦を求め

たことが知れよう。蜀の諸葛孔明も決敵の資は錦に求めると述べてゐることは有名な談草であるが、その隆盛を物語つてゐる。成都に官設の錦院をはじめたのは宋の元豊六年(一〇八三)であると蜀錦譜に書いてゐるがそれ以前から錦宮があり地名を錦里と称してゐるので官設ではなかつたかと思われ。『蜀錦譜』によれば前記の年、呂汲公大防が轉運司錦院を建て五百の匠人を募集し、百五十四台の織機を据付け、挽綜工百六十四人、杼工五十四人、練染工十一人紡績工百十人を使役し、歳費は十二万五千兩、使用染料の紅藍紫蒨の類が二十一万一千斤、それで六百九十疋の各種錦を織つたことが書かれてある。そして建炎三年(一一二九)にはさらに茶馬司錦院を新設し夥しい数を織出したようである。

本品はいうまでもなく法隆寺裂の一種で飛鳥から奈良時代までに渡來した隋より唐頭初期のもので殆ど同文で大小二種傳わつており、法隆寺、正倉院其他に同系のものが傳わつてゐる。表裏二面を示し織物組織を見るのに便ならしめておいた。格子の中央に藍色の緯糸を打込んだところは裏面からよく判るのであるが、これは複辨の蓮花の輪割を作るためのみの緯糸であつた。主調たる紅色の美しさは今を距る千二、三百年前の作であるかを疑わしめるくらい新鮮さが認められる、蜀江錦の特長である。名物裂集大成の「和漢錦繡一覽」には「蜀江錦極上代七百年余地茶但し五色惣もん蜀江もやう内にヨリ金にて蜀江の二字あり但し二重舎のように見ゆる蜀江のはくつかいなり」とあるのは多分宋代のものを指したのであろう(明石染人氏書)

## 二、綾

錦の牡丹をみるような豪華な麗しさに対して、綾は清楚な佳人に對座しているような芳しい、静かな美をもっている。穩かな艶と、真珠のようななごやかな光をもつ絹の布が、深々と蘇芳や黄櫨に染め出されて美しい。

その美しさの奥底に、ほのかに織文がみえてそれが円文に堂々たる巨龍であつたり、雄頸な鳳凰であつたり、葡萄唐草であつたりする。この綾文の布が動く度に光に照つて或は陽に、或は陰に、変転するのを見るとき、それがいかにも微妙であり、いかにも面白い織物であつて、之を織出した天平や盛唐の工人に対して、深い尊敬の念をおこすのである。綾は不思議な魅力をもつ織技である。綾は薄地である。経も緯も一重である。経と緯とを唯巧みに組みあわせることによつて自由な文様を織出す。つまり糸のとり方の美技によつて出来上つている。綾は生糸のまゝ紋織にして後染をするのが立前である。染め上つて生地が柔らかくなる。柔らかくなると敏感に光に戯れて動く、その動きに応じて織文がみえかくれる。この面白さは糸が組織されて出来る織物という造型構造を最も有効に活用した技工であるといえる。錦と異つて動的な美の新天地であり、織物のみのもつ美の宇宙である。綾の組織は奇数の組織である。そこに綾の秘密がある。単純な平織は経緯交互に上下左右とも正しく一上一下で組みあつて作られる。だからどの方向にも平均に糸の力が活用されていて強靱である。之が偶数の所産であつて強いが単純で平板である。割り切つ

た考えをもつ人のように素朴である。綾は柔軟である。一本の糸が二ヶ所沈むとあと二ヶ所表面に浮き上つてその次の一ヶ所が沈むそして又あと二ヶ所浮き上る陽二ヶ所陰一ヶ所（三枚綾）の原則にしたがつて織つて行く。すると緯糸の光る方向と経糸の光る方向とに差がつく。ある方向から光が当れば経糸が一齊に光り、他の方向から光線が来れば緯糸が皆輝く。交叉点を陰にするか陽にするかによつて生じる綾文の形は自由にならない。又生地が強さも成立たない。数学的智識が発達して倍数の知識が正確になつて上下左右共に糸のよみが楽に活用されなければ美しい綾文は織上らないのである。中国では、綾の生地は非常に古くからあつたと想像される。夫れは綾と同じ組織が竹や葉のあみものである網代等にあつて、之が非常に古い文化所産であると考えられる。唐の朝廷には綾錦坊があつて巧兎が百数十人技を競つたそうである。今日正倉院にある織文の綾は恐らくこの綾錦坊の所産であろうと言われている。日本では雄略天皇の御代に呉から漢織、呉織の織姫を招来された。呉は漠然と揚子江地方を指したもので、この地方は亜熱帯性の気候であるから、綾は自ら需要があつて発達し唐時代には天下第一の称をほしいままにしていた。この地方の秀れた織技を持つて日本に來た織姫達は今日神社の位置からみて昔の開港場であつた池田附近に工場をたて綾を織り始めた。それから千数百年の間、日本でも綾は織りつゞけられたのである。天平のそめ物の生地となつている綾、平安朝の右職の綾、鎌倉の鎧の下の小袖等、常に日本人にいつくしまれて來たこの織技は又いくつかのローマンスを日本人の歴史に投じている。義経の小袖に

は静御前の涙がにじんだであろうし信長の小袖には戦いの鮮血がとびちつたことであろう。綾地裂には仮名の麗しい歌がのこり、袈裟の金襴のうら、茶入の袋の裏には、いかなる織人が織つたか分らないが綾は静かに控えている。

綾織の一例（正倉院蔵）



### 三、緞子

緞子は純子ともかかれています織物の地風に対する名称で中厚地の紋織で経糸を十分に糸数を増しておいて緯を異つた色糸でおると色が混つて所謂玉虫の織物になる。玉虫の一对一を二対一の綾

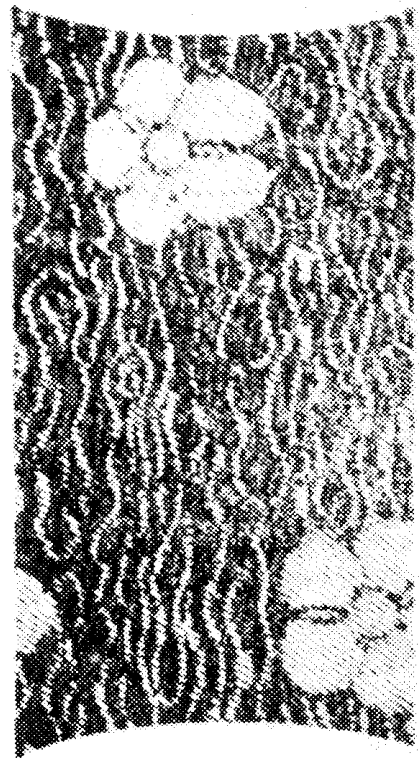
目に、更に三対一、四対一、五対一と経緯の組み方をかえていくと、緞子になるのである。濃い色を織出したり、紋様を鮮かに出すために経と緯の糸づかいを変化せしめたり、強いより糸を用いて、新しい地風を工夫したりして支那緞子をして世界の追隨を許さない卓越した織物にまで発達したのである。この織物は宋元明清の各代にわたつて中支（蘇州杭州等）及び南支で織出された。即ち漢から唐まで黄河沿岸地方にあつた絹織物の中心が宋代には揚子江流域へ移つた。

この地は亜熱帯であつて元来が薄い綾の主産地である。綾はうすきにすぎ、錦は厚きにすぎる。その中間の中厚地の紋織が自ら必要となつてくる。この需要に応じた発明が緞子である。綾の数学的な組織の考え方と錦の美術的構想が調和されたのである。この織物の名「緞子」は蒙古語の「織物」タン、トン、ドン等から発して漢人の愛称たる子がついて緞子と云う呼び名になつたと言われる。

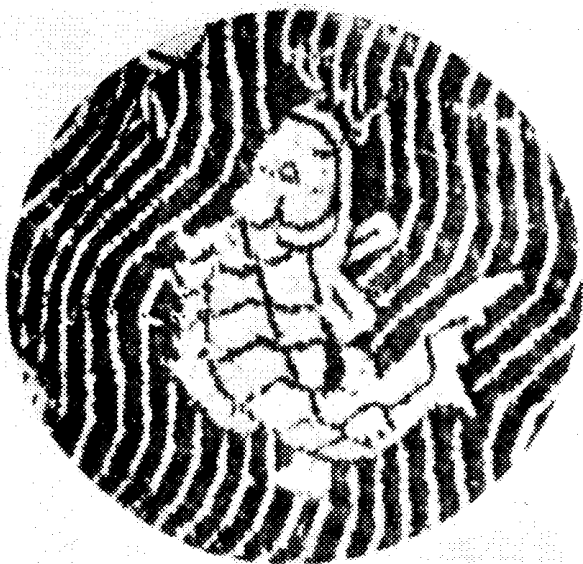
北方の異民族は騎馬で武力に富み、終始中国を圧迫し、常にその武力を背景として有利な交易を求めた。漢の武帝や唐の太宗の盛時には、漢民族の反撃が成功しはるか天山南路をこえて波斯や欧州へ交易し、絢爛たる世界文化をきずいたのであるが、唐末から北方異民族に対抗する武力を失い、次第に南方へ南方へと移住した。公然と長城の守りをこえた異民族は遼、金等の国を建て、漢民族から、茶と絹織物を貢物として取り、それを遠く波斯方面へ売つて巨利を得、その威力の下に更に漢民族を圧迫した。彼等が駱駝の背にのせて交易するためには、

重い錦より軽く用途の多い緞子が有利であつた。糸が少なくてよく売れる緞子を売るとは漢民族にとつても非常に有利な事であるから、緞子織は忽ち大産業となつた。蒙古族の国元が、宋との中間にあつた遼や金を滅し、直接宋と接するに及び元が特に宋に要求したのは緞子であつた。元朝は支那本土に入るや漢民族の技術家を使つて自らも緞子や金襴を織ろうとして陝西省に工場を建て又、家庭でその研究を行つたのである。之をみても緞子がいかに要求されたか、実証されると思う。この異民族の圧迫に対抗して、漢民族は揚子江を中心として宋の国を建てて頑張つた。北宋南宋を通じ彼等は実に敢然と戦つたのである。その戦は漢民族にとつては精神力対武力、文化対蛮力の闘争であり、聖戦であつた。元は既に、亜欧大陸の大半を征服した大国であつて、実力の差は甚しいものであつたのだが、宋はよく団結し、強い精神力を發揮した。その精神は禪宗によつて培かれていたのである。

緞子の美的内容はこの禪宗の偈の如く、一点の無駄もないつきつめたものであり、一味無量の味をたゞえている。あるものは宋代の水墨画の如く、あるものは名僧の一喝の如く又あるものは達磨三年の面壁の如く幽玄な内容を含んでいる。絹織物を渡すことによつて暴力を防いでいたのだから之は国の運命をかけた織物であつた。しかも見事にそれに成功して宋にも巨富をもたらした織物でもある。元が同様な織物を織出そうとしても、緞子の内容には「蚕夫にこんなものが出来るものか」という宋人の叫びが、意気がこもつている。その意気から宋人の深刻な工夫が生れたのであろう。



緞部緞子



荒磯緞子

その一点はその幽玄な趣味である。「金言」の如く言簡にして意の長い、含蓄された内容である。その二点は、禪宗に

似た静けさである。

その三点は、織物の哲理に触れたような、力強さである。

その四点は、極めて渋い味、茶人で云う佗び寂びの境涯である。之等は皆禪宗の理想の示すものに近い。要するに緞子こそ禪宗文化の所産そのものである。我が国にあつては北条時宗が、世界の大国元を相手に一戦を辞せぬ決心をした時無限の精神力を与えた人は禪僧である。禪僧こそ当時中国の誇であつた緞子や金襴を日本にもたらした人達であつた。宋元の間は漢民族の非常な困難にきたえられた劇しい精神力その精神のもつ深い味が、平和な何事もないような一片の裂に含まれているところに緞子の美と意義がある。禪僧が華美な金襴を避けて緞子を価値ありとした人生観や、茶人が先づ指を緞子に屈して他をあげなかつた偉大な教訓があつたればこそ、明末以後中国の緞子が随落した現在にあつて、日本のみは古い立派な創造精神に富んだ緞子を茶入の袋とか帛紗に残していて日本の文化財となつているのである。

#### 四、金 襴

金襴（銀襴、金緞、紗金などを含めて）わが国では地方によつて古い習俗で日頃信仰する寺へながしか纏つたお賽銭でも奉納すると寺から（おまもり）などを頂戴しその中にこの寺で由緒ある織物の小さな切端がいられてあつたりしたものである。例えば今から四、五十年前には法隆寺などでもいくらか寄附すると、太子間道とか錦とかの五分にも足らぬ小片が御守にいられて授けられた時代もあつたことを故老からよく聞かされたと又聞きした事がある。これはもちろん古い珍奇な織物を尙んだ風からでもあるが、それよりも古い織物のもつ由緒、歴史、に魅惑を感ずるので

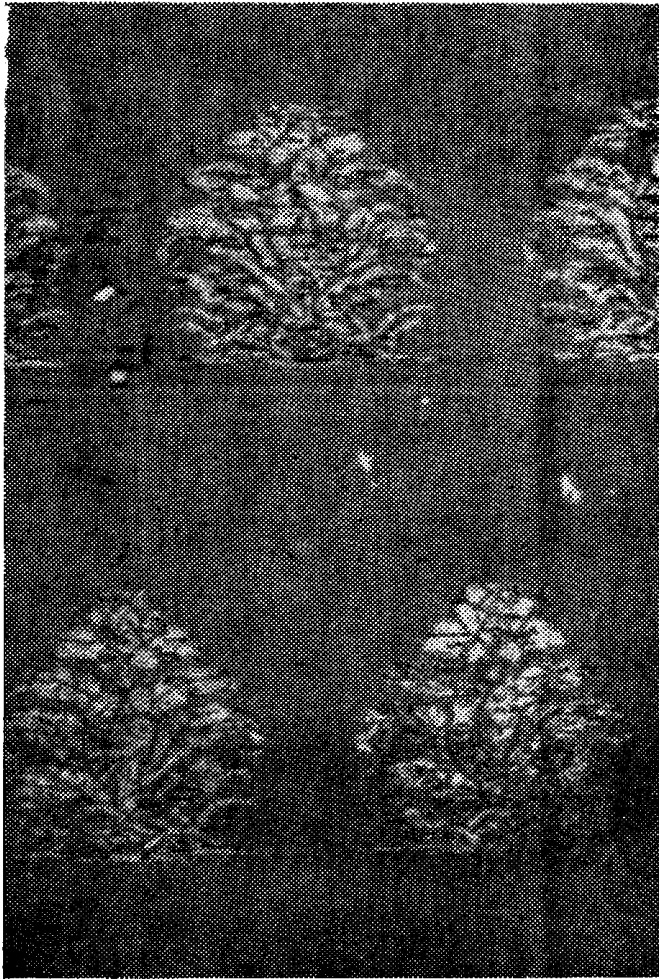
あろう。法隆寺の場合聖徳太子が勝鬘経講讚のときの御褥の裂であるとか平素身につけられた織物とかの伝説が信徒にとつてはこの上ない憧れであつて、その五分でも一寸でもの小片を大切に御守とし日常肌身離さないでいることが無上のよろこびであつたのである。由緒を愛し、歴史を尊び、主上を敬するという心情が茶の湯にまで及ぶことは当然でこゝに名物裂に発展したものとみてよいであらう。

金襴という名称であるが明朝という織金の類で、平凡社、大百科事典には錦の一種であつて平金糸を緯に打込み模様を織出したものであると説明している。被服文化協会編の被服大事典には、絹織物の一、斜文地のものゝ縹子地のものゝがあるが、いずれも地緯には経糸と同色に染めた練糸または生糸を用い、絵緯に金箔糸を織り込んで紋様を表わし、多くはこれを別搦糸で押えたものである。用途は主に袈裟、仏具用、打敷、袋物地などである。能舞台の幕や、衣裳の水干、打懸等にも使用された。銀襴は金箔の代りに銀箔を用いたものである。

東洋に現存する最古の金を織り込んだ織物の实例は、正倉院の綺二片と聞く。その綺は細巾の綴織で極く小部分に金が僅かに残つているのがみられ、その一は五彩のみづ龍の文様の部分であり、他の一は草花文様をかこむ市松形の輪廓線の所であつて共に貴重な断片であるためそのものが金線であるか、金箔糸であるか未だ明かでないそうである。これにても唐の時代に金を織込んだ織物が稀にあつた事が立証される。金襴とは中国での文字か日本で考えた名かは古くから問題にされていた。わが国では鎌倉末期

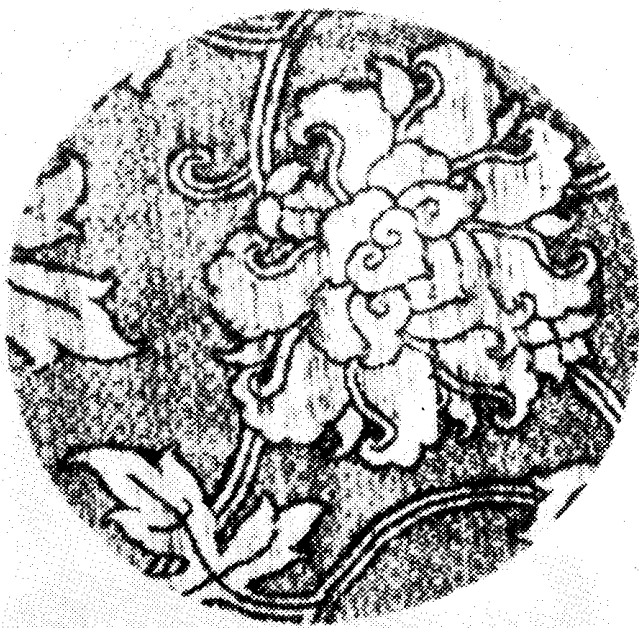


名物裂 大鶏頭金欄



から室町初期には金欄と呼ばれていた事実がある。「大平記」巻二十七田楽の事附長講見物の事の条に「楽屋の幕には纈纈を張り、天蓋の幕は金欄なれば」とか「粧ひ紅粉を尽したる美麗の童八人、一様に金欄の水干を著して」田楽能舞台の幕や衣裳の水干、打懸に用いたことを述べている。

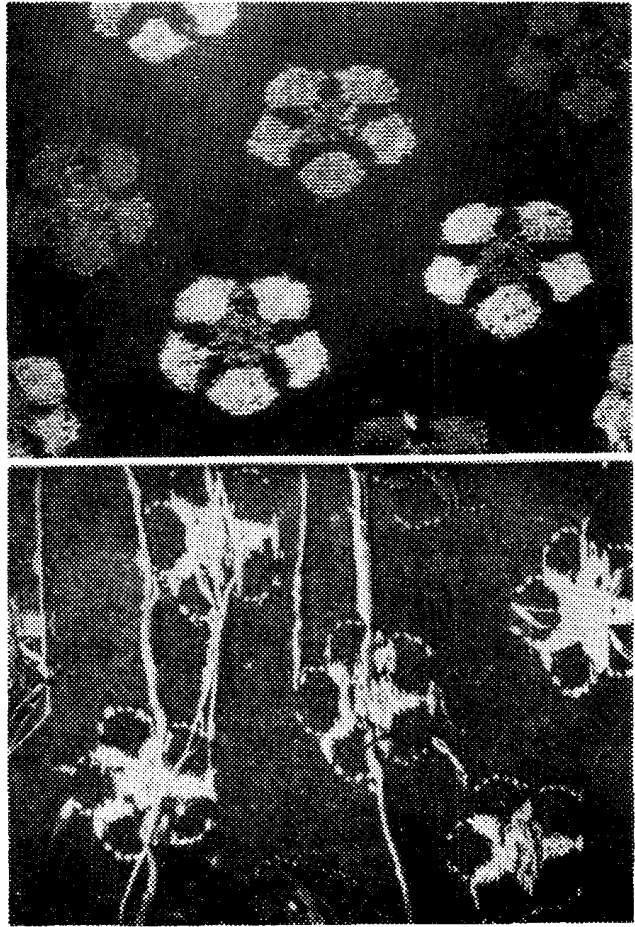
元の時代は織金は大切な貿易品となつたことが知られる。西域から織金の工人三百戸を広州に移し局を置き織金を織らしているが之は陸路の貿易から即ち海路の貿易に織金の工業を移した事を意味していて緞子と共に如何に元朝が如何に織金の貿易を重視していたかが明かである。日本でも足利尊氏の天龍寺船を始めと



金地二重蔓金欄

し、義満等の將軍、大名達が相競つて金欄の輸入を行つた。その衝に當つて富を得たのは大内氏や大友氏であつて今日、大友桐とか、大内桐等という銀欄が残つている。足利義政の頃には余程豊富に金欄銀欄の類が日本に貯蔵されていたと思われるのは、東山御物の豪華さである。義政が応仁の乱を避けて東山に移り、芸阿彌等同朋衆と共に、古名画を愛翫し、名画名墨蹟に表装をした時その内容にびたりと映る表装を自由自在にしている事実はよく事情を物語つている。今日では支那を始め世界中探しても、此等の表装に用いられた様な立派な宋元の古金欄は見られないそうである。先般新国宝となつた名画、徽宗画「桃鳩」の金地小牡丹金欄

なでしこ手金襴



の丸表装や、牧谿画「観音猿鶴」の三幅対の金地二重蔓大牡丹金襴の丸表装のような壮観は我国世界に誇るに足る文化保存の功績であるといわれている。金襴で名物裂はその殆んどが中国から渡来したものであるが我国でも金襴の需要が頓に増加し追々わが国でも製作される機運となり一般に信じられるところでは天正年中（一五七三―一五九一）中国の織工が聘せられ、和泉の堺で織法を伝えたものもとで、後京師西陣の野本某氏がこれを伝えて織出し漸く盛んとなり九十年後の天和の頃では品質精妙となり中国製を凌ぐほどになったといわれている。

写真説明（大鶏頭金襴）

本品は厚板織風で蘇枋地いわゆる丹地を呈し褪色即ちさめ

いろになつてゐる。文様は道引大鶏頭というのであるが道引とは鶏頭の作土の根のところに葉のようなものが双方に派生したものを俗称したものらしいのである。文様の寸法は縦横二寸ばかりで上下に一寸六分、左右に六分位の間隔をおいてぐの目にならべられ、文様は上の行と下の行の葉の派生の方向と花の形にちがいがあつた。極くわずかな差異ではあるがこれが相当な効果があるこというまでもなかつた。

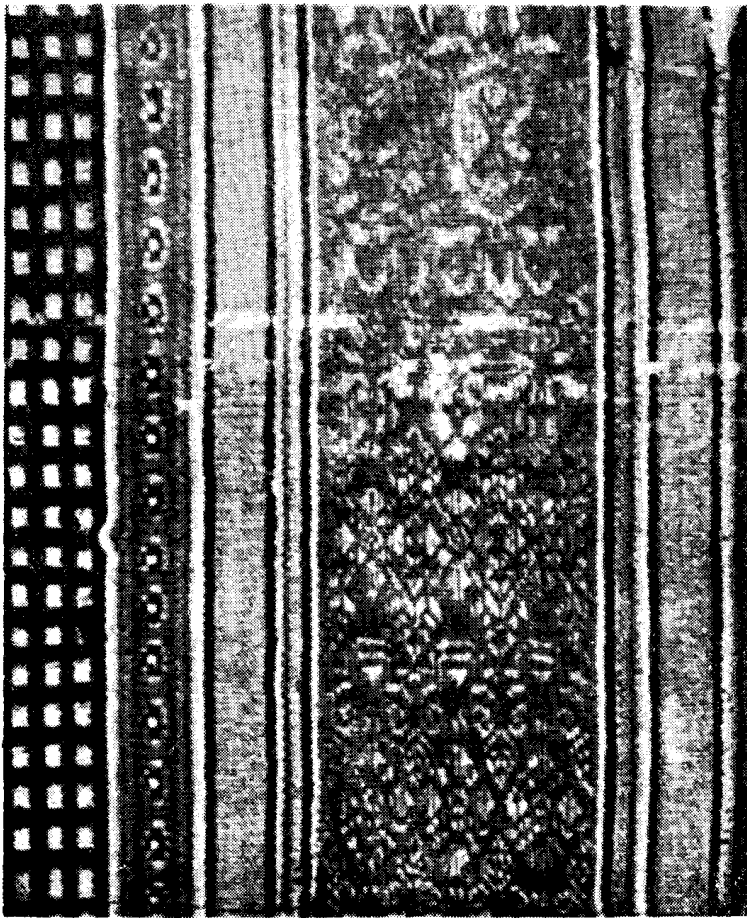
本品は鶏頭、葉鶏頭と見立てられていた。併しよくみると牡丹花を頂におき、ゆるやかに作土型に中央の花茎から七枚の葉が程よく左右に派生し下部には観世波のように見える土波が描かれた至極おちついた豪華な金襴で前田家旧藏の本品はまことに良保され、製作されたと思はれる南宋時代から春秋七百余年の星霜を経てもなお金箔も認め得られる程に残つてゐるそうである。まことに大鶏頭金襴の本品は名物裂中の名物たるに恥ないのである。

五、間道

元寇の嵐を乗り切つた日本は、漢民族の憧憬の国民であつたろうし、支那海の制海権は、日本の掌中に帰しつゝあつたのである。九州の松浦党はもとより瀬戸内海、四国、伊勢湾又は鎌倉の浜辺から八幡の旗を押し立てた日本の船隊が南へ南へ押し進んで行つたに違ひない。九州博多はやがてその根拠地となり、そこに名物間道裂を輸入した船頭満田彌三右衛門の名が、今日の博多織の開発者として残つてゐる。間道があるからには、彼等の航路は既に

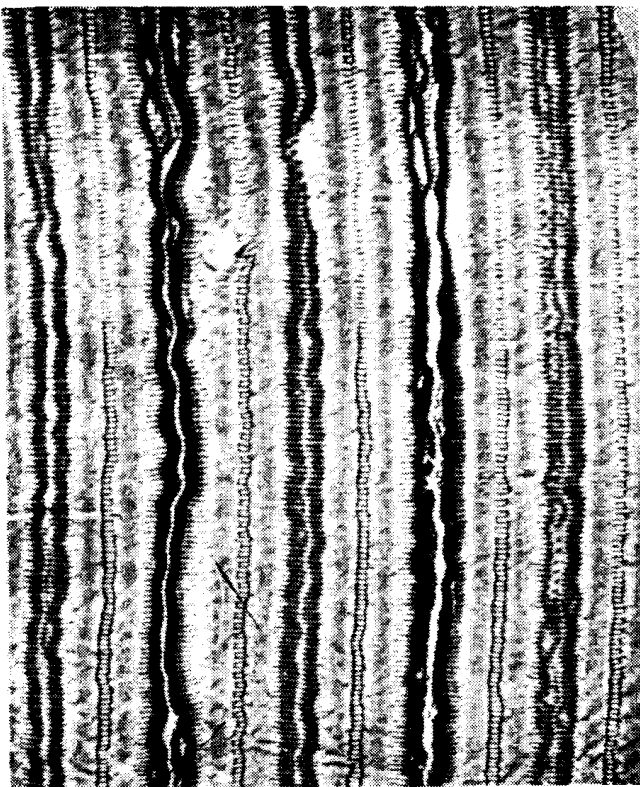
南支那、ルソン、シヤム、マレイまで延長していたかも知れないのだ。彌三右衛門間道はその証拠である。鎌倉では源頼朝が着たと云われる鎌倉間道と、同じくそれに近い鶴ヶ岡間道が残っている。平安朝公卿が珍重した海外の珍品を愛する趣味が武家の源家の将軍にも伝わっていたのである。殊に間道は従来日本人の殆ど接した事のない珍品であつた。新奇な物が好きで特に織物を好む日本人にとつて間道の持つ豊かな異国情趣は非常な魅力があつた

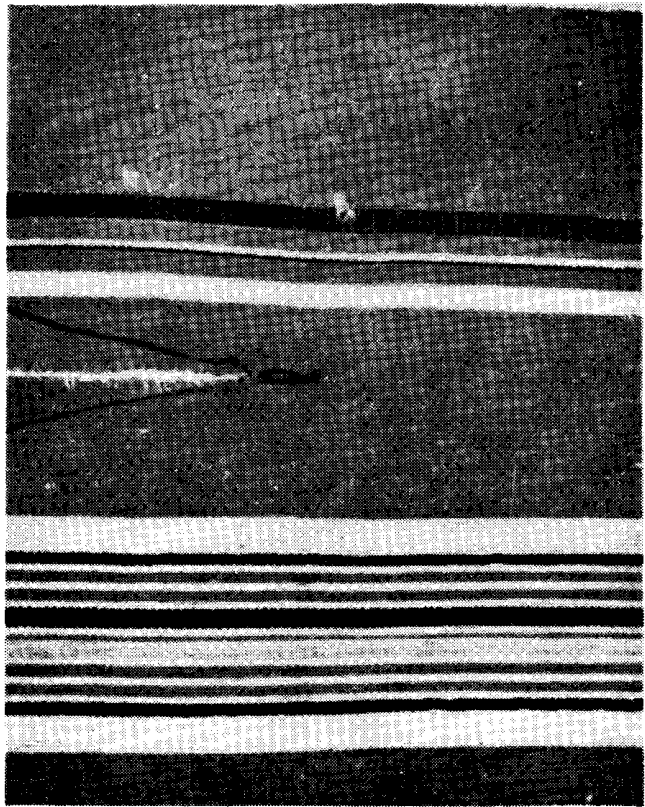
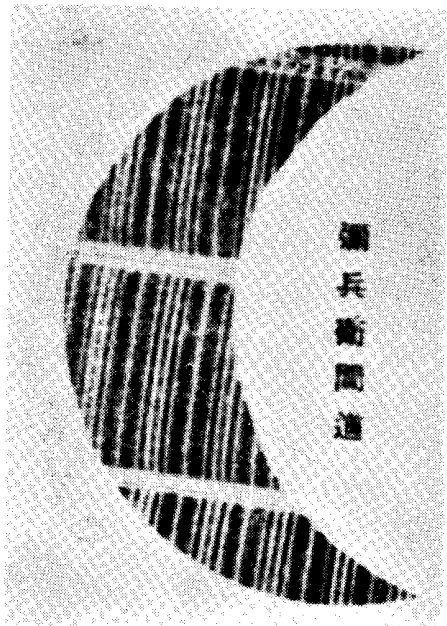
宮内間道



のであろう。不思議な事に、日本には古代から平安朝まで単なる縞物が少ない。正倉院御物の長班錦というのは原則的に縞であるが紋入りの経錦であつて縞の趣味ではない。平安朝の有職は殆んど単色に染め上げられたもので、多彩平行の美感はその衣をかさねて着る方法で出している。二色の経糸を交互に並べるヤスラ経は正倉院御物の格子裂にあるが之も縛糸を二色交互に織組んで行つた格子であつて縞の趣味を形成していない。之に反して染料の

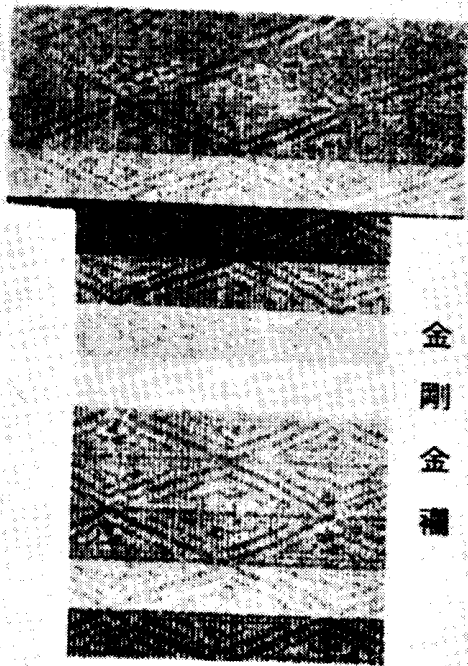
日野漢東



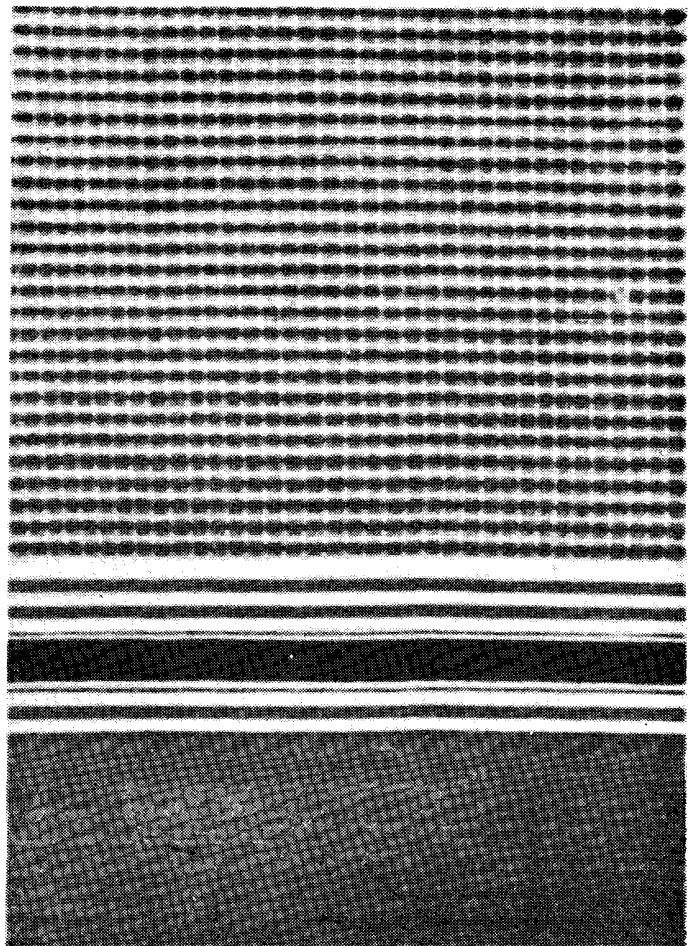


赤地間道

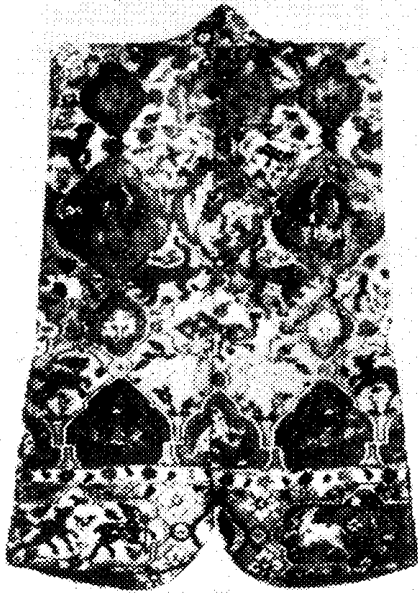
望月間道



金剛金襴



豊富な熱帯では縞物は極めて自然に発達し得る地盤があるのであつて、其地から西へ東へ、この粋な趣味は伸びて行つた。文芸復興期の伊太利壁画には白と赤の縞ズボンをはいた粋な伊太利の騎士がみられ今日では世界中の人々が縞物をいろんな形で愛用している。アフリカ土人の縞は太く粗い原色で組みたてられ、ロンドンの服地は精緻な組織入りの縞である。さて名物裂の縞物を何故間道と云うのであろうか。漢島、漢東、漢道、漢渡、間島、閑島間道、等一定していないが何れも南支那の要港広東の名に音通である。学者によつては、安南、シヤム印度、ジャワ等南方諸国はもとより遠くイタリヤ、オランダ産の木綿の縞織物、いわば俊に唐棧とか、棧留縞の類を間道名物裂の部に入れる人があつるが、古い渡りものゝ縞即ち名物裂の間道ではないと思ふ。では名物裂というのは「名のある裂地」という意味で「名がある」というのは日本古来の讃め言葉である。「あの裂は



豊公陣羽織 高台寺藏



名物だ」ということは「あの人は名人だ」というが如き讃辞である。それを足利義政はその同胞衆と共に豊太閤は利久居士其他の人と共に、研究して国家の権威を以て「名物」と定めるに及んで動かしがたい工芸品の美的評価が確定したのである。現在名物裂とよばれて、表装の裂とか仏具仏僧の法衣袈裟とか能衣裳水干打懸刀袋茶道具の袋物等よばれている数は同品異名大略三五〇種以上はあるといわれている。その種別的に例えば金襴、錦銀襴及び金紗の類で百五十種以上緞子及びその類品で約一五〇種間道の類で約三十種、印金其他の各雑物で二十種あまりであつて原則としては江戸時代初期元祿以前に渡来した染織物を指

すのであるからそれ以後の渡来品や、我が国で做製したものは含まれていないのである。

## 六、名物裂の名称

室町時代から桃山時代を経て江戸初期に至る対明関係によりまたポルトガル・イギリス・スペインなどの交通によりヨーロッパ近東南方諸国の工芸品や文物が多数流入し偉観を呈したことは空前であつた。明の織芸は頗る隆昌しある意味では唐宋を凌ぐものがあつた。中でも万曆四七年間は我が信長秀吉家康の統治期間に相当し、わが桃山文化に大きな寄与があつた。特有の緋色と豪華な文様で一世を風靡した万曆調は染織陶磁に特色を發揮し明代最終の華麗な作品を作つた。この時代に渡航した学問僧又は来朝僧によつて将来された法衣、袈裟、卓被、等の華麗な織物、金襴、金紗、緞子、印金、刺繡其他は禪宗その他各寺院におびたゞしくもたらされた。本圀、相国、大徳、天龍、本願、知恩、本能、龍光、其他数々の寺院に所蔵されている多数の例がある。学問僧が明の留学を終えて帰朝する毎に師承の伝衣、袈裟の類をもたらし万人の渴仰を得たものである。風を望んだ幾千万の僧徒もこれに準じ漸くその做製に成功を見た。和製の金襴、金紗、緞子がとぶようにうれたさうのある。又茶の湯は禪宗によつて確乎たる地盤に立つて展進した。この道に必要とする衣類、敷物、軸の表装裂、袱紗、袋等それまでわが国は衰退して作り得なかつた高級織物を先ず明製のものにもとめたことは当然なことである。このように時代を経た敷物を時代切、名物裂として渡来品を意味したも

のである。

名物裂の名称は、大燈金襴とか荒磯緞子とか、吉野間道などと呼ばれている名称はその殆んど全部といつてよいくらい日本化した称呼である。同一織物で二つ又は二つ以上の名称をもつことになる。名称の分類を、1 織物の文様によるもの、2 所有所伝者の名によつたもの、3 所在地所在場所の名によつたもの、4 茶入の名をつけたもの5、その他の場合によるもの、以上の五つに分ける。

例えば織物の文様を和式によつて呼ばれる普通のものをあげる

金襴 〓 鶏頭、花兎、鴛鴦、花麒麟、劍太鼓、雲鶴、角龍等

緞子 〓 劍先、笹蔓、藤種、雲珠、雲鶴、茶磯等

印金 〓 二重蔓、大牡丹、作土花兎、押分所蔵者、所伝者の名を

冠したもの

金襴 〓 大燈、富田、和久田、金春、尊氏、角倉、吉野、小早川

佐竹、権太夫、井筒屋、京極、細川等

緞子 〓 白極、大友、定家、小進、山名相阿彌、淀屋、道玄、遠

州、紹鷗、珠光等

間道 〓 彌三右衛門、望月、桑山、下妻、吉野、宮内、八左衛門

等

所在または所在地場所の名を冠したものをあげると、

金襴 〓 興福寺、嵯峨、長樂寺、東大寺、大覚寺、金閣寺、建仁

寺、高野、東山等

緞子 〓 正法寺、本能寺、嚴島、法隆寺、

間道||法隆寺、鎌倉、鶴ヶ岡、江の島、姫路等

織物種類の名などをあげると

風通、もうる、天鵝絨、かいき、蝦夷錦、しじら、長羅絹、蜀巴、紗金、さらさ等

七、名物裂の渡来年代及び調査表

名物裂渡来年代の最下限は元祿よりやゝ古く寛文八年（一六六八）頃が一応の界線をなすようである。それは中国からはもとより諸外国からの交易品が次第に増加し民心も泰平になれて華美を競うようになり一面輸入額超過による国内経済的な見地からもあるうと思うが、寛文八年三月には儉約令を嚴重に布告し奢侈品輸入禁止令を発し同時に品種を定めて輸出をも禁止した。輸入禁止の奢侈品のうち染織関係品には毛織物や花毛氈類は例外として中国などで製する絹紋織の莫大な輸入を禁じ羅紗、毛氈の如きものは許している。この禁止によつて一応の線と想う。

時代別	同上通称	時代の説明
古期	極古代渡 (極上代渡)	室町時代以前に舶載した唐、宋、元代の製
前期	古代渡 (上代渡)	室町初期より應永頃まで義満中心の約百年間の渡来品名物裂搖籃時代
中期	中古渡	室町中期より末期に至る約百年間の渡来品、義政を中心とした時代
後期	近古渡 (近渡)	室町下期(天文)より桃山時代を中心として慶長に至る約八十五年間の渡来品茶道全盛時代

以下次の書により調査表作成されしもの、文化三年江世泰翁編の和漢錦繡一覽、寛政三年松平不昧公の古今名物類聚、文化元和和漢錦

江戶初期(元和)以後約七十年間の渡来品で延宝天和を最後とする。

一覽書所載記録調査表の或部分をあげると

名称	概	年代
鶏頭	かは色地牡丹土文大小あり宋代金二十枚	五百年余 (文化三年) より以前
大徹翁燈	丹地及白地蝶形蠶雲筒井肩つき尾州肩つきの壺の袋南宋僧道隆より傳承衣徹翁は大徳寺二代三百貫	五百年余
大内菱	赤茶色地入子菱に牡丹唐草大内義隆所傳本能寺まんだらに用う明代	四百年余
大内桐(嵯峨桐)	紫、茶、丹、縹各地色あり入子菱地に桐文数種あり義政が大内義隆に命じ嵯峨清涼寺本尊戸帳用に中國で織らしめたもの、同寺に現藏	四百年余
金剛	五色経縞に宝ずくし文秀吉が金剛太夫に與えし能衣裳明代類品多し	二百二十年位
金春	五色の経縞に梅鉢唐花金春大夫所傳、明代能衣裳代金三枚位	五百年余

尊 氏	高 野 切	建 仁 寺	大 友 菱	銀 閣 寺 東 山 裂	花 兔	荒 磯	嵯 峨	狩 場	二 人 静
白又は茶地つなぎ花菱文尊氏鑑 下の服地と傳う元代	丹紫地に雲文高野山の袈裟裂、 明代	各種地色唐草唐花文建仁寺の跡 布袋図の表装安樂庵手明代 三枚位	萌黄はなだ地菱に木瓜に龍文、 銀欄もあり大友宗麟所傳明代 三枚位	形あり雲に鶴文あるを東山又は 銀閣寺という義政の命令にて中 國にて製す二枚位	白紫地作土花兔文種類多くピロ ド地もあり宋代より清初に至 る古金欄の一三百貫	花色地波に鯉文数種あり銀欄、 黄緞の一明代三兩位	丹地靈芝雲に宝づくし天龍寺開 山夢窓國師の袈裟と傳傳う宗	白地龍の丸文頼朝が狩の衣に用 いたと傳明初代	紫又は丹地双鳳丸文織田有樂 齋茶入の袋、義政が二人静の舞 に用いた衣裳ともいう宋代丹地 橋屋宗玄の所傳
不 詳	不 詳	不 詳	不 詳	三 百 年 余	五 百 年		七 百 年	六 百 年	

住 吉	雲 鶴	定 家	珠 光	笹 蔓	本 能 寺 (三雲屋)	正 法 寺	下 妻	白 極	名 稱	◎名物裂緞子の記録調査表の一部	糸 屋
蘇枋地鱗文の数種あり、明代名 物住吉文琳の袋裂代金一枚	花色地雲鶴文 明代	花色又は茶地桔梗菊に唐草丈正 法寺類切、明初、鳥原の定家太 夫の衣裳	縹地雲龍文、明代、名物松屋肩 つきの袋 徐淵鷺図表装裂	地色各種笹蔓文文様類型数種あ り宋代—明代、代金二枚	縹地青海波宝散し文 宋末 本能寺所傳 三雲屋は縁地	縹地ピロド桔梗菊唐草宝散し 文、宋末正法寺所傳	こき緑地文様白極に同じ宋末、 西本願寺坊官下妻少進所傳	縹地ピロド網の目に尾長鳥文 宋代義政舞の白極大夫に與え鼓 の袋としたもの	概	要	白地花色の棧くずしに輪宝文茶 人糸屋良亭所傳風通織明代 五兩位
	三 百 年 余	四 百 年 余	二 百 年 余	三 百 年 余		五 百 年 余	四 百 年 余	七 百 年	年 代		



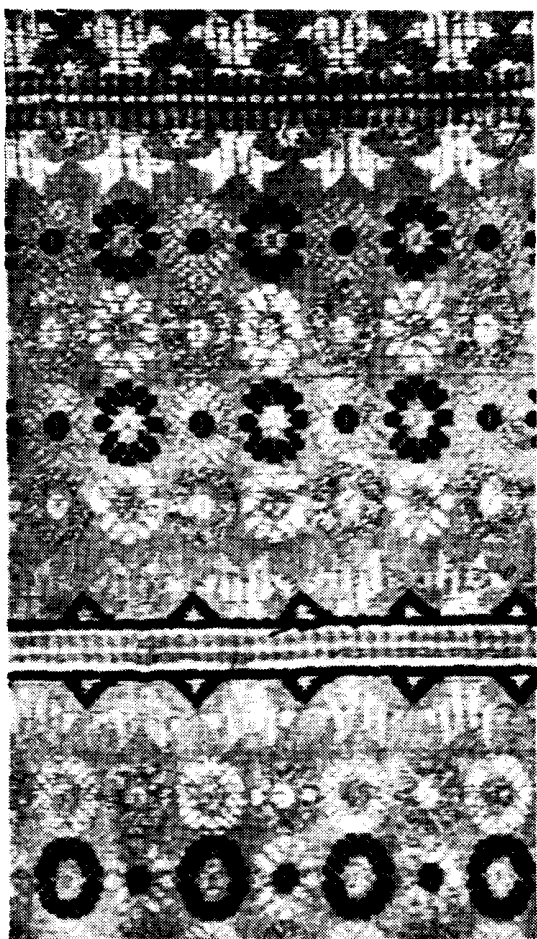


◎名物製印金一覽表						
名称	説明	明	高麗	紋紗	さや地	綾地
朝鮮印金	地上代に同じ、紋色々、紋の下朱漆	二百年余				
上代印金	地色赤トビ鼠黒とび藤色、紫文様、花兎、二重蔓牡丹	四百年余				
	地色品々文様品々牡丹唐草作土多く押分あり					

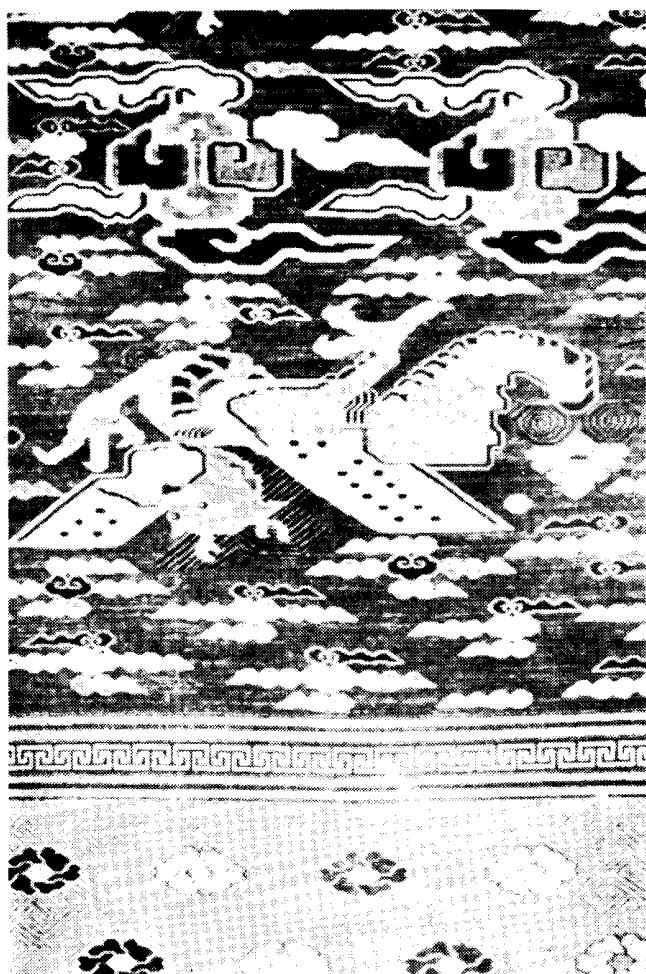
利休	紹鷗間道に似る、十字緋入、紺地浅黄、小格子所謂棧崩し千利休所傳、南方製	二百年余
鍋島	茶地、絳縞、花色地に浅黄の小石疊がある、明代製	三百年余
宮内	赤池、茶縞一寸ばかり緯三分ばかり眞田を打込む、明代製	三百年余

京	奈良
---	----

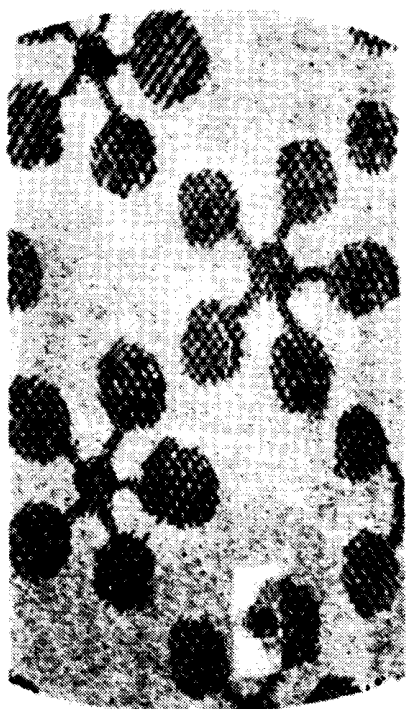
以上名物製表の年代は文化三年以前何年と計算してあるので今日から計算するには更に約一四八年加算する事になる。



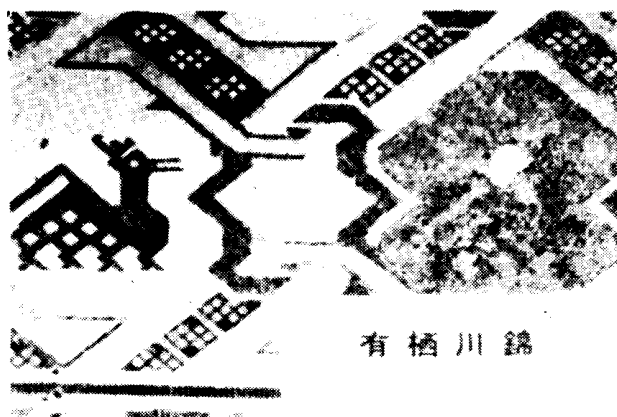
覆盆子手錦



雲龍文有栖川錦



利休綴子



有栖川錦



早雲寺文台裂（銀欄）



紺地花兔金欄